

氏名(本籍)	佐藤徹(島根県)
学位の種類	博士(コーチング学)
学位記番号	博乙第2480号
学位授与年月日	平成22年2月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	運動指導におけるキネステーズ理解の構造 -志向分析能力の形成に関する現象学的考察-

主査	筑波大学教授	博士(体育科学)	朝岡正雄
副査	筑波大学教授	博士(体育科学)	尾縣貢
副査	筑波大学教授	博士(学術)	山田幸雄
副査	筑波大学准教授	教育学博士	清水諭

論文の内容の要旨

(目的)

体育・スポーツにおける指導の中核は生徒や選手の運動を修正し、新たな運動の習得を促すことにある。この意味の運動指導では、指導者は観察に基づいて学習者の運動の欠点を発見し、改善のための予備運動を処方することが求められる。しかも、この予備運動の処方には、指導者が、学習者には何ができて何ができないのか、また運動の遂行中に何が分かって何が分からないのかを把握することが前提となっている。言い換えれば、運動の指導では、指導者が学習者自身の「キネステーズ」(運動体験の総体としてとらえられる運動感覚を表す現象学の用語)体験を把握していることが求められる。それにもかかわらず、指導者が学習者のキネステーズを把握する方法を指導事例に基づいて具体的に取り上げた研究はこれまでない。本研究の目的は、現象学的運動研究の鍵概念となる学習者のキネステーズを指導者はどのようなすれば把握できるのかを事例研究を通して明らかにすることを通して、運動指導の方法を具体的に提示することにある。

(対象と方法)

本論の第一部では、運動観察における質的把握の重要性とその際に用いられる類型的把握の方法を概説し、さらにマット運動における「とび前転」に関する観察実験を通して、運動観察では運動の外的経過だけでなく、遂行者の体験内容にまで迫る観察力が不可欠であることを明らかにしている。第二部では、マット運動における「倒立前転」と「後転」という2つの運動の指導事例に基づく研究を通して、できない学習者のキネステーズを指導者が読み取れない理由を明らかにして、指導者が学習者のキネステーズを把握するには「移入的観察」の方法が不可欠であることを示している。続いて第三部では、筆者自身の新たな運動(「スノーボード」)の学習体験に関する事例研究に基づいて運動の自己観察の問題を検討して、原初的知覚から解釈学的循環を経て想像図式の把握にいたるといふ運動内観の構造を例証的に明らかにし、さらにバレーボールにおける「アンダーハンドパス」の指導に関する事例研究を通して、運動遂行者の意識にのぼらない受動的キネステーズを把握する方法として、フットサルの意味の「脱構築」を応用した「キネステーズ解体」の方法を具体的に提示し、続いて、運動熟練者である指導者自身がこのキネステーズ解体の方法を用いてみずからの運動感覚意識を覚醒させることが必要であることを示している。最後の第四部では、運動の客観観察、移入

的観察に基づく他者の運動の志向分析、キネステーゼ解体を用いた指導者自身の運動感覚意識の覚醒といった、指導者に求められる運動分析法相互の関係を明らかにして、指導者が学習者のキネステーゼを理解するための方法をまとめている。

(結論)

以上の考察を通して次のことが明らかにされた。(1) 運動指導では、目標となる運動を行うときに遂行者が体験する動きの感じを学習者に伝えることが不可欠である。(2) 運動の最中に学習者には何がわかり何が分からないのかを把握するために、指導者には移入的運動観察の能力が求められる。(3) 移入的観察能力を身につけるには、キネステーゼ解体の方法を用いて意識化されていない動きの感じを指導者自身が意識的に把握することが必要である。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、運動観察に関する事例研究から出発して、運動指導では学習者に動きの感じを伝えることが不可欠であることを明らかにし、そのために学習者の運動感覚世界を理解する方法として移入的運動観察を取り上げ、さらに指導者自身が学習者に伝えるべき動きの感じをとらえるためにキネステーゼ解体の方法を取り上げて、それらの具体的な仕方を指導事例に基づいて明示したという点で、運動の指導実践に直結する研究として高く評価できる。今後はさらに運動の学習指導に係わる事例研究を積み重ねて、多様なスポーツ種目における応用研究へと発展させることが期待される。

よって、著者は博士（コーチング学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。